



嘉永
再板

女
川梅
文庫

假名
論語
生
涯
明
鑑

完

9
3409



口 9
3409

改正
再校

女今川梅苑文庫 完

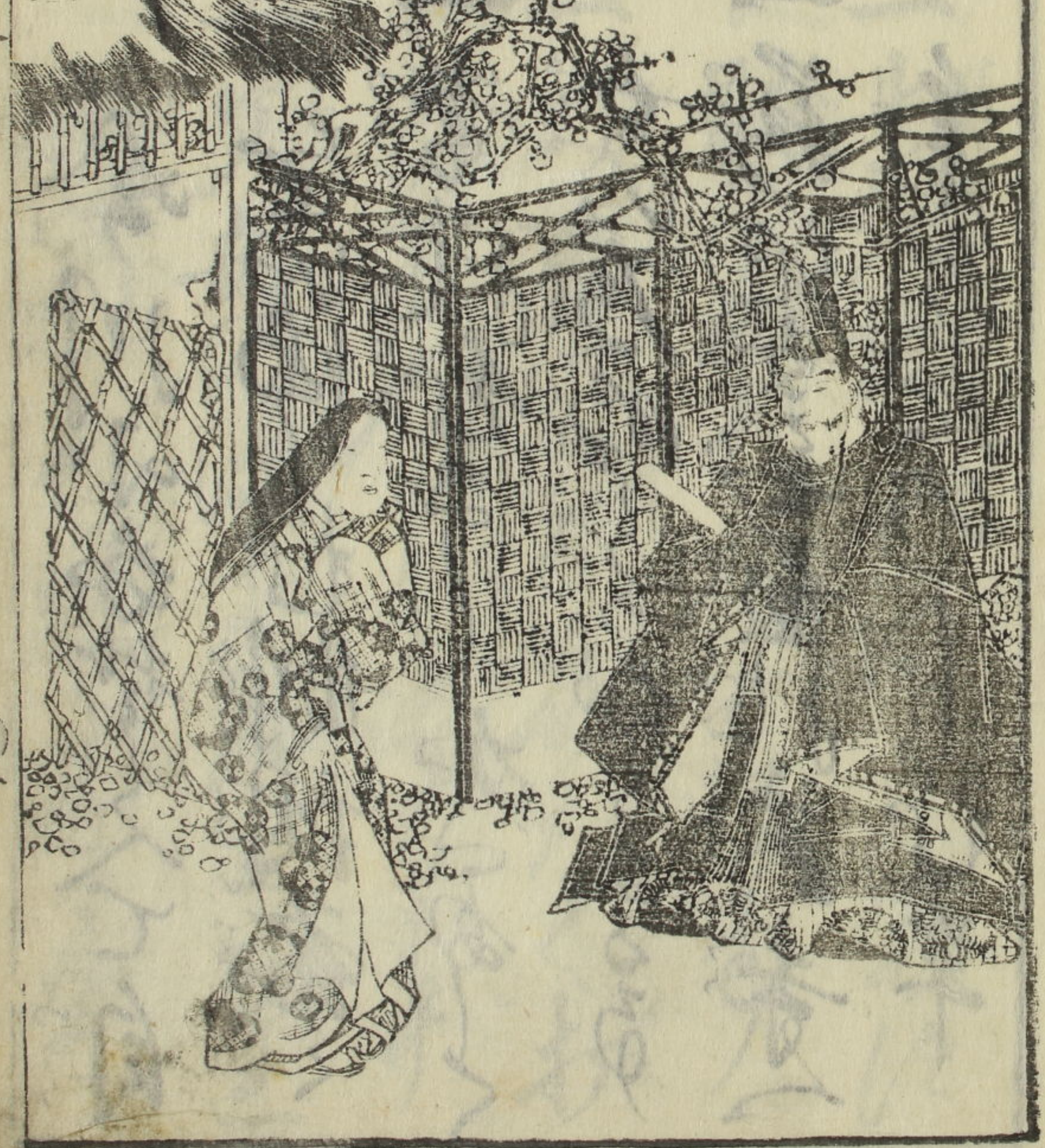
元 校

天曆帝の時
清涼殿乃まへ
ある梅の本松
久西乃東ある
家より求物て
なまふ何やん
紙を結付しり
色のみり



故
横山有策氏
昭和四年五月
寄贈

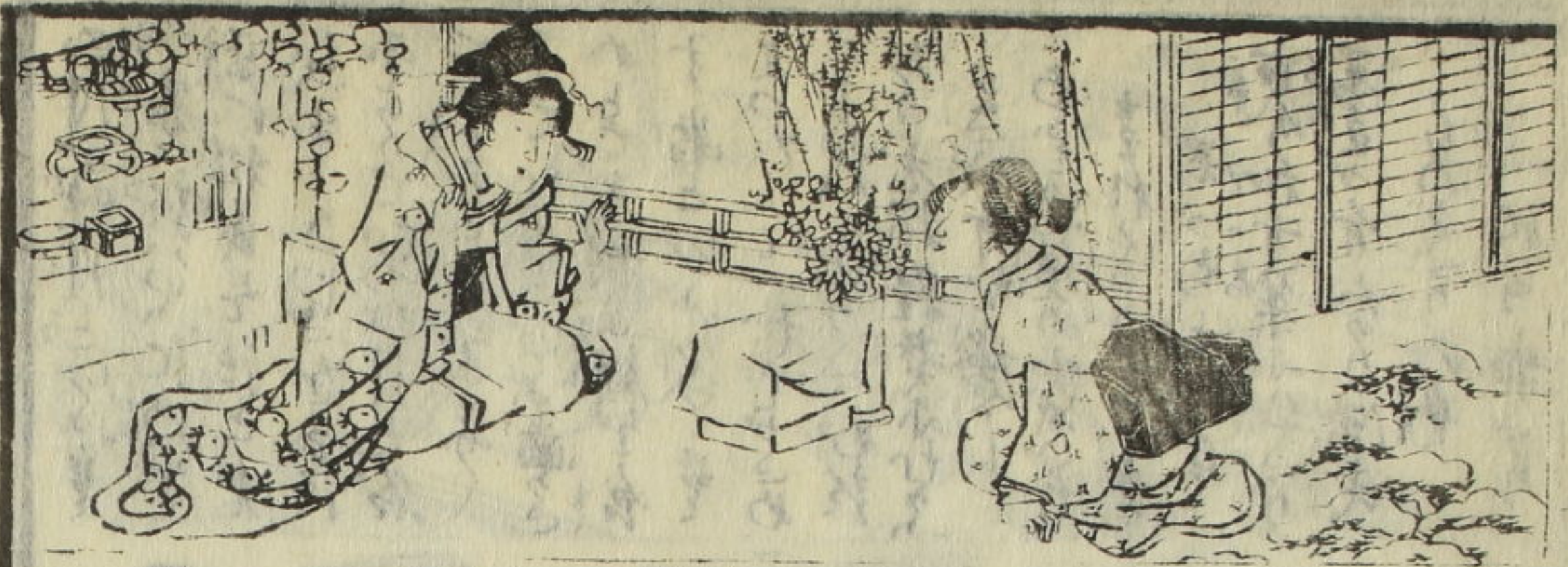
新に其秋
れはて書る
何れある
かんと
のみ
娘の
更なる
ふひる
城を



今川ふを替へて自
をい海む制詞集
一常れをさかめく
女の及明くあくる
一めた女を並れえ寺
ありたのむ半

[illegible]

一 才起程とて何くあは
敗は多く人を恨む
一 大事をなす毎なくお
とある人へ語る事
一 父母の深き恩を忘る
孝乃ち名跡ある事



一丈をこの海へめりてと
 立く玉屑散るはるる
 一道み背くも岸ゆる
 りのを美え彩る
 一正直みとれと海へる
 人城あふむる幸

三月首を上げていふ
 櫓の影をえ海をのぞ
 みるはあまのこころ
 りとて一人は民
 あり民衆といふとこ
 小惑ひきこみ水
 かなしきを海より
 命を二白余集り
 海へまればは世に
 櫓の影をのぞく
 のこころの曲を
 民衆といふとこ
 のこころの曲を
 民衆といふとこ
 のこころの曲を

一抱びみちと武と
 度以を集あひハ
 足抱をもちる好事
 一横魚にて娘は心
 ぬく人の物をふれり
 一女の権利根り迷ひ



万事に對人を識る
 一人の中を成全人の愁
 を以て身を樂る
 一存類乃具已美惡を
 處に仕え若事
 一生を妙も法ある

五月六日を機とて
 て機をひき置き
 ありてのちこゝの
 利氏の子思入りて
 九月六日舟にのりて
 をさすりと死なば
 小僧とてしるす
 此れとて人々を
 まゝにありて
 東のちのちを
 流し入る
 五色の雲とて
 して人々を
 する
 ありて
 ありて
 ありて

一とをふふ年法を好る
 一人非を阿あまは
 智ありとれり事
 出家沙門の對面と
 一我を際を志し法成



一 ねぐり或は不足はる
 一 中人及吾恩を承て
 一 けしきひきう正
 一 けしきる事
 一 賢姑小そ満つめて
 人の機を治る事

七月七日に夕
 聖佳余乃新あり
 あり女を召しん
 あり淮南子とて
 書にあり香苑を
 そあ人修物を
 根の葉小枝を
 折乃家をつあ
 五の糸をうけて
 さいのる三のう
 あり小袖を梅
 一き小袖を梅
 又そ終うとて
 根をうけて身
 てあはれはひ
 大ねもあ

一 継子に疎小て他人
 の相成不能
 一 男ある小ハ能方全
 親教たりとて志
 一 道をも教人を嫌ひ



家小魚川らふ友を
 走す果る
 一人來新時王が不機嫌
 小海をいふ里残る
 皇礼乃事
 右付條々常小公心を

九月九日を重陽と云
菊乃花をりてあそび
酒をのみ栗飯喰ふと
りてこゝに養長房を
いふ仙人桓景といふ者
ふかきでいふ九月九日は
汝が家より災あるべし
あつと云くつをぬきて
月に葉葉を入てひぢ
ふか山へのりてきく
の酒を肴にけりてき
酒のつゆをりていふ
桓景よりへのおと
なへくふか山へあ
りて家の内の大鶴
とてぐく死せりこれ
より今病に菊を
酒をのみ
後ふこと
始ふり

ら系熱なる事
かゝる事なる事
粒心ては
事なり先家を
念ふに
念ふに

一代守本尊 并 尊書

勢至菩薩 廿五日

三 七のころ



はるんごん 釈迦牟尼くまきままつ

大日如来 八日

三 ひのころ



はるんごん 釈迦牟尼くまきままつ

多くは夫の心
陽のて強く男の
厚く地を陰ふて
和み女れさなり陰ハ
陽一志さふり

不動明王 廿八日

三 七のころ



はるんごん 釈迦牟尼くまきままつ

八幡大菩薩 十五日

三 七のころ



はるんごん 釈迦牟尼くまきままつ

天地自然の道理ある
由へ夫婦のまをさ
地みあふきれた
夫を天恵くうや
あひつ川と海とさ
まねはち天地の

十手觀世音 日 十七日



三 ねのう
はるんげん
おんありきやまこり

虚空藏菩薩 十三日



三 うのう
はるんげん
おんありきやまこり

ありけまばいとあまこ
よるんをえやうを
座ある友み海より
かり初めと根ぐはく
結き友みをよる人
うみ水の方あけえ

文殊菩薩 日 廿五日



三 うのう
はるんげん
おんありきやまこり

普賢菩薩 日 廿四日



三 うのう
はるんげん
おんありきやまこり

み志こぐひ人きき
悪乃友りよれと
いふり実ある式愛を
りつる能あを治れ
女を正しきる代好む
うりや傳るなり人の

女中	名	字	盡
森	福	繁	文
満	采	玉	光
金	由	沢	光
新	竹	梅	倫
紫	効	房	永
火	底	衣	岩
五	哉	曲	久
花	為	題	久
吟	秋	松	葉
姫	提	玉	源
産	室	中	竹
蝶	尚	等	傳

善悪を知り後ふべきに
 其人老親にむ書を
 見く新るといふ事
 阿まを誠子を何りき
 となり家を礼を女
 うこあーを氣配

徳	六	壽	町
末	五	隆	徳
流	丹	楠	子
隆	中	新	好
終	安	虎	市
寄	徳	鳴	民
門	坂	福	毎
茶	東	末	里
森	子	種	松
岩	松	晴	石
他	徳	七	三
琴	奇	光	三

なる事をこのむといふ
 朝夕和と心城のり
 見く何れをいふ
 若小松里にむ書
 不常れ理を信て生れ
 ありといふも或る

一 ぶんくハ おどん
 一 ひーア おまむ
 一 まきお おまぶ
 一 あそびハ なつそ
 一 布あハ ひを
 一 わりうハ りく
 一 大んハ くさみ
 一 こがうハ どん
 一 うの抱ハ うく
 一 るさハ ふれど
 一 まあけハ まめし
 一 たけのみ つけ
 一 うわハ なまのま
 一 くらたハ うきく
 一 いちハ かむ
 一 あこハ たりど
 一 まねハ そのもろ
 一 するえハ すろく
 一 せーハ すろど
 一 遊びハ 表りど

幾百又ハ下すぢ
 あべくまぐろ
 いりきハ 甘きゆり
 まりホハ こづし
 ちやうハ ちやう
 其のいハ うぶむ
 奇ぢろハ ついで
 せハ おあ
 移るを おあまる
 物なるを おひる
 言はるゝおめ
 なくを おむろ
 髪ハ おぢー
 髪油を おあまる
 髪あるを おぢー
 毛分を おくひわづ
 人よがハ めそ
 うまハ いーい
 内是ハ おさわ
 用のみハ おのこ

まづしく疾く有りた
恥あるに邪なきこと富
といふとも智何れ
人小味まぬべし
王が若魚を志せん
おもしろく変れし物

おごやうなうバ王グ
 行善をわねる
 ことへる
 我心正
 知べし人を正はる
 日月は東来西去を

照一 孫ふとく心
我めくく 誓乃
人々に語る 然く
はくふ 願ふを
完 實

原板
西村屋傳兵衛
西村屋與八
人形町通松島町
松延堂
伊勢屋庄之助板

